フレッシュマンコーナー

新規開業便り

宇部市医師会　わたなべクリニック
渡邊　俊介

2020年４月１日に宇部市西小串で新規開業させて頂きました渡邊俊介と申します。

私は福岡県福岡市の出身で、卒業した小学校の先輩にはタモリや森口博子がいます。中学校から長崎県にある青雲中学校という私立の学校に入学し、寮生活を送っていました。その当時の寮は大変規律が厳しく、自衛官上がりの寮監の下で軍隊式の生活を６年間送りました。

私の父親はサラリーマンで、親戚を含めても医師は一人もいません。高校生の時に北 杜夫のエッセイを読み、「精神科医になりたい」と思ったことがきっかけで、医学の道を志すことに決めました。今思えば当たり前のことですが、「精神科医になるには医学部に行かなくてはいけない」ということも高校２年生の終わりごろまで知りませんでした。高校受験がなく、５年間の間にほとんど勉強らしい勉強はしていなかったこともあって、受験勉強は大変苦労しましたが平成13年に山口大学医学部に入学し、初めて九州を離れて暮らすことになりました。大学生活では級友にも、部活の先輩、後輩にも恵まれて、楽しい学生生活を過ごしました。

平成19年に卒業し、山口大学の研修プログラムに参加し、１年目は下関厚生病院（現下関医療センター）、２年目は大学病院で研修をしました。平成21年に山口大学精神科神経科に入局し、多くの先生方の指導のおかげもあり、精神科保健指定医を取得することができました。そのころ、防府病院の水津信之 先生に誘っていただき、自分も地域密着型の医療に興味がありましたので、平成25年に防府病院に就職しました。防府病院では医局の先生方に大変よくしていただいて、何一つ不自由なく仕事をすることができていましたが、宇部から防府までの通勤距離が少し負担になってきたことと、妻が公認心理師で長年発達障害のある児童の支援をしており小学生までの児童

に特化した発達相談事業をしたい、との希望があり、住み慣れた宇部市で開業することを決意しました。

開業準備には２年ほどかかりましたが、開業地選定、クリニックの設計についての相談、スタッフ採用面接、銀行との打ち合わせ等を、通常勤務終了後や休日等に行っており、忙しい毎日を過ごしました。普段の診療業務ではあまり接することのない様々な業種の方と一緒に仕事をすることはとても新鮮で、世間知らずだった自分にとって少し世界が広がる経験だったと思います。

少しずつ準備を進めて、建物も完成して、という段階で新型コロナウイルスのニュースを目にするようになりました。最初はSARSのような、大変な病気ではあるが自分たちの生活にはあまり直結しないものではないかとあまり深刻に考えずにいましたが、次第にその猛威は世界中に広がり、生活、仕事全般にわたって大きな影響を受けることになりました。特に2020年４月に緊急事態宣言が発令されたときには、クリニックを開業してまだ一週間あまりであり、その直後は予約の電話も全く鳴らず、飛び込みの患者さんも一切来ないという自分自身がうつ病になるのではないかという不安な日々を過ごしました。

幸いにもその後徐々に患者さんにも来ていただけるようになってきましたが、まだまだ一年目でこれから頑張っていきたいと思っています。

精神科、心療内科というと敷居が高く、何やら病気も薬も恐ろしいものであると考える患者さんがまだまだ多くおられます。自分の方針として、なるべくきちんと患者さんの話を聞くこと、そして病気や治療についてきちんと説明してから行うことを心掛けるようにしています。病気に関しては、精神科の疾患自体がある程度経過を診なければ診断が難しいこともあり、最初から診断名についてまで告知をしないことは多くありますが、薬に関してはいつ頃からどのように効果が出るか、副作用はどんなものがあるか、いつ頃まで服用をする必要があるのか、などを説明し、安心して治療を受けられるよう心がけています。病院に勤務していた時と比べて軽症の方の割合が多く、抗うつ薬や抗不安薬などを以前と同じような量から開始すると眠気やふらつきなどが生じやすいことを知り、少量で開始するなど自分の処方を意識して少し変えました。隣接した敷地にある薬局の先生から１年間で処方された薬剤ランキングを出して頂いたときに、一年前までは処方していなかった薬が思った以上に多く出ていて、驚きました。

精神科は自立支援医療や障碍者手帳の診断書、傷病手当意見書、休職用診断書等々、とにかく書類が多いのが特徴の一つですが、自分はもう10年以上、精神科の世界で生きてきて、それはもう当たり前になっていました。ただ初めて精神科で働くことになったスタッフにとっては驚きだったようで、他科に比べて書類仕事の多さに驚いたとよく言われます。それでも工夫をしてきちんと事務作業をしてくれるスタッフには大変感謝しています。また看護スタッフも精神科は初体験とのことでしたが、予診もわかりやすくとってくれるだけでなく、患者さんに親しみやすい笑顔で話を聞いてくれて、患者さんからの評判もよく、大変助かっています。

これまで心理師の妻とは別の職場で働いていたので、夫婦喧嘩をしたときは医局の先生に愚痴を聞いてもらっていましたが、今は話を聞いてくれる人がいなくなりました。お互いにストレスがたまることもありますが、つまらないことで長く喧嘩をすることは減ったように思います。これまでの病院では祝日は休日でなく、曜日で休みが決まっていたため、子供たちとお盆や年末年始などの連休を一緒に過ごしてあげることができませんでした。開業してからは祝日が休みになり、休日も朝からゆっくり過ごしてあげることもできるようになりましたが、その代わり土曜日が半日勤務になったため、学童保育を利用する時間が増えて、少し寂しい思いをさせているかもしれません。その分一緒に過ごせる時間は大事にしようと心がけています。

スタッフともども、これからも初心を忘れず、地域の医療に貢献していけますよう努力してまいりますので、今後とも県医師会の先生方にはご指導、ご鞭撻いただけますよう、よろしくお願いいたします。